

8月9日（命の講話）

## いのち、そして人生・・・私は、生きる

詩人の相田みつをさんに「自分の番 いのちのバトン」という詩があります。

### 「自分の番 いのちのバトン」 相田みつを

父と母で二人  
父と母の両親で四人  
そのまた両親で八人  
こうしてかぞえてゆくと  
十代前で、千二十四人  
二十代前では——— ?  
なんと、百万人を超すんです

過去無量の  
いのちのバトンを受けついで  
いま ここに  
自分の番を生きている  
それが  
あなたのいのちです  
それが わたしの  
いのちです

私たちは日頃、自分の命は誰かから受け継がれてきたものという意識はありません。自分という存在は誰ともつながっていない、切り離された「個」と思いがちです。しかし、実は私たちは命のバトンを受け継いで、今を生きています。体育祭のリレーを想像してください。前の走者から受け取ったバトンを持って走っている自分の姿を想像してください。ここまでバトンをつないでくれた仲間のために、また自分のバトンを待っている次の走者のために必死に走っている自分の姿を想像してください。バトンを落とさないようにしっかり握りしめて、前を向いて、必死に走っている姿を想像してください。バトンは受け継がれてきた命であり、走る距離は自分の人生です。そう考えると自分の人生は自分のもの。しかし、自分の命は自分だけのものではないということです。

私たちの命がどこから来たのかもっと突き詰めれば、約46億年前に地球が

誕生し、約38億年前に海の中で生命が誕生したことに行きつきます。地球上に生命が誕生した確率は「10の4万乗分の1」と言われています。例えて言うと、腕時計を分解して、バラバラになった部品を25M プールに投げ込み、水の自然の流れによってまた元通りの腕時計になるぐらいの確率と言われています。私たちは38億年前の遺伝子が受け継がれ、あるものは絶滅し、あるものは進化して今ここにいるということです。そう考えると、今、私たちが「生きている」ということは何という奇跡か、何て素晴らしいことか。何てありがたいことか。生きていることは、ただそれだけで凄いことなんです。

人類が滅亡しない限り、私たちの命はこれからも受け継がれていきます。しかし、自分の人生は一度切りです。人生は時間を巻き戻すことはできません。私が高校生に戻りたいと思っても戻れないのが人生です。皆さんが中学生に戻ることもありません。つまり、人生というのは時間という乗り物に片道切符で乗っているようなものです。生きていれば楽しいことばかりではありません。きついこと、辛いこと、嫌なこと、悲しいこと、むしゃくしゃすること・・・誰もがそういうことも抱えながら生きています。自分に起こる全てを受け止めていくことが自分の人生を生きるということです。

朝、目が覚めるということ、ご飯が食べられるということ。口加高校の制服が着られるということ。歩けるということ。自転車に乗れるということ。勉強ができるとうということ。部活動ができるということ。笑えるということ。夜、眠れるということ・・・この日常の当たり前に感謝しながら、自分の人生を力いっぱい生きていきましょう。人は一人では生きていけません。隣に仲間がいるということ。家で待っていてくれる人がいるということ。誰かと共に生きているということ。誰かのために生きているということ。誰かに生かされているということ。今日も、そしてこれからも人に感謝しながら、人を喜ばせながら、もっと明るく、もっと楽しく、もっと笑顔で生きていきましょう。

最後に、放送作家の永六輔さんの「生きているということは」という詩を朗読してもらい命の講話を終わります。

### 「生きているということは」 永六輔

生きているということは 誰かに借りをつくること  
生きていくということは その借りを返していくこと  
誰かに借りたら 誰かに返そう  
誰かにそうしてもらったように 誰かにそうしてあげよう

生きていくということは 誰かと手をつなぐこと  
つないだ手の温もりを 忘れないでいること  
めぐり逢い愛しあい やがて別れの日  
その時に悔やまないように 今日を明日を生きよう  
人は一人では生きてゆけない  
誰も一人では歩いてゆけない